

三、約三種門明

一。本文「向説智慧慈悲方便三種門撰取般若、般若撰取方便応知」

これは、『往生論』に天親論主が説かれた言である。即ち「向に障菩提門に於いて、智慧門、慈悲門、方便門の三種門が説かれた。この三種門は般若の智慧を撰取する。又般若は方便智を撰取する」とこれが論の文意である、これは如何なる義であろうか。

一。已に障菩提門に於いて、論には「一には智慧門に依りて、自樂を求めず、我心自身に貪著するを遠離せるが故に」と説かれ、鸞師は「進むを知りて退くを守るを智と曰い、空無我を知るを慧と曰う。智に依るが故に自樂を求めず、慧に依るが故に我心自身に貪著することを遠離せり」と註釈せられた。

智慧門、慈悲門、方便門とは、これ本菩薩が成就せられる巧方便中の差別である。即ち、一切衆生を救つて利他成就せんとする菩薩の大悲利他心の内容なのである。その利他の大悲を明かさんとするに当たつて智慧門を説かれるのは、不可解のようであるが、智慧によつて真実の自利を成就することより外に、利他の世界を成就することはないが故である。そこで、この智慧門に於いては「智慧門に依りて、自樂を求めず、我心自身に貪著するを遠離するが故に」と、智慧門に於いて、却つて自らの樂を求めるところを捨てることが説かれる。これ自樂を求めるところの凡夫や二乗は、自樂を求める限り、自損損他の道をゆくものである。貪欲の自利は、自利ではなくて自損である。我的心が自身に貪著することこそ自損である。自損は必ず損他である。そこで智慧門の智を「進むを知りて退くを守る」とて、智を实践的なものとなし、「空無我を知るを慧という」とて、慧を体験的なものとして表現せられた。

「退くを守る」とは、自樂にとどまろうとする心から出ることであり「進むを知る」とは、自樂を求める心から出たのみ、不退転の歩みを成就することが出来ることを示されたのである。かくて、方便智の具体的相たる第一智慧門は、体験的な智慧がその根底となり、それによつて自損損他を遠離しようとするのであつて、般若の智慧なくしては巧方便の世界は成就しないこと、衆生済度の巧方便は、如実の智慧、即ち般若の実智を内具することを示せるものである。

一。第二の慈悲門を説いて、論には「二には慈悲門に依りて、一切衆生の苦を抜き、無安衆生心を遠離せるが故に。」と曰い、鸞師は「苦を抜くを慈と曰い、樂を与うるを悲と曰う。慈に依るが故に一切衆生の苦を抜く、悲に依るが故に無安衆生心を遠離せり。」と説かれてあつた。無安衆生心即ち衆生を安んずることなき心とは、我心貪著心の一步発展したものである。已にあつては我心貪著心であり、それが一步外に衆生に向かえば無安衆生心である。我による貪著心の人は、人に不安心ばかり与える。であるから、この我身貪著心と無安衆生心とは別なものではない。慈悲門によつて抜苦与樂するには、そこにこの無安衆生心が遠離されねばならない。ここにも巧方便を全うする為には、その根底は如実の智によらねばならぬことが示されてある。

一。次に「三には方便門によりて、一切衆生を憐愍したまう心なり。自身を供養し恭敬する心を遠離せるが故に」と。この論の説に対して、鸞師はこれを釈して「正直を方と曰い、己を外にするを便という。正直に依るが故に、一切衆生を憐愍する心を生ず、己を外にするに依るが故に、自身を供養し恭敬する心を遠離せり。」と説かれた。方便門とは、衆生を憐愍する心であるが、特に「自身を供養し恭敬する心を遠離する」ことが示される。この自供養心が方便門に於いて捨てられなければ、利他の大慈悲は成就しない。しかるに方便の語を釈して、方とは正直、便とは外己(己を外にする)ことと説かれたことは注意すべきである。正直とは何であるか、これ智慧の相である。便とは己を外にして、傍にして、衆生を正とし、内とすることである。あたかも母親が、己は外寒さに堪え、子供を内に温めるが如くである。かるが故に方便とは智慧に即する慈悲である。慈悲に即する正直によつて、一切衆生を憐愍する心を生ずるのであり、智慧に即する慈悲即ち、己を外にする心によつて、自身を供養し恭敬する心を遠離するのである。であるから、方便門もその根底には智慧を内具するのである。

一。以上によつて智慧慈悲方便の三種門は、それ自体、真実の智慧を根底とせることがわかつた。これ論主が「三種門は般若を撰取す。」と云われる所以である。真実の方便智は永遠に実智即ち般若の智慧を体しているのである。

次に「般若は方便を撰取す」と説かれるのは、般若の真実智は必ず方便智となつて現れて来るものである。実智が必ず衆生済度の方便智を具することを「般若撰取方便」(般若は方便を撰取す)と云われるのである。かくの如く般若と方便とが互いに相望して、権実相撰の義を顕して、智慧等の三門が、或は般若に帰し、或は方便に撰して、権実相即することを、名義撰対と云われるのである。

一。本文。「般若者達如之慧名。方便者通権之智称」

二智の分齊

一。これより已下、曇鸞大師の註釈である。

般若とは如に達する慧の名である。如とは真如、真如に通達する智慧を般若というのである。一切諸法(すべてのものということ)は、本来同一真如である。凡夫はこの般若の智慧を成就せざるが故に、万法の差別に囚われて、我心貪着心をおこして、その優劣によつて、取捨の迷情をおこすものである。しかるに、仏菩薩は、この般若の智慧によつて、万有、本来同一性相にして、差別を超え、一如平等なることを照見するのである。諸法の本性は真如である。故に真如を法性と云われるのである。諸法は、柳は緑、花は紅なるままに、平等なる真如法性である。真如は、不可壊であり不増不減である。この万法の本来同一真如であることを照出す光こそ、般若の智慧である。

然ればこの万有の実相、即ち法性真如を照出す般若の智慧は如何にして成就するのであるか。これ即ち、菩薩の修行によるのである。大経に於いて、法蔵菩薩の永劫の

修行を説かれるはその為である。願行成就して正覚を成就するとは、無量寿、無量光の法身を成就するに外ならない。無量光とは智慧光である。般若の智慧の光明である。光明は寿命を体とする。寿命とは、無為法身、即ち真如法性の三世に等流する相である。されば、智慧光とは、真如そのものの光に外ならない。であるから般若の光とは、真如に出でて、真如を觀照するのである。般若の智慧とは真如の光である。真如の光によつて真如に通達するのである。それは宛も、太陽の光によつて太陽を照らし出すが如くである。太陽以外の光によつて、太陽を照見することが出来ない。

一。次に方便智を釈して「方便とは権に通ずる智の称なり。」と云われる。般若の智が平等一如の世界を照らす智慧であるに對して、方便智は、差別の衆生界を照らす智である。権とは實に對する語で、一切差別の事相を悉く権法となし、常住不變の真理を實法というのである。先の般若が真理(即真如のこと)を照らす光であるに對して、方便智は、一切万有差別の事相を照らす智慧である。そこで、般若と方便とこの二智を、実智、権智と云い、又真諦の智、俗諦の智と云い、又根本智、方便智とも名づけられるのである。太陽の光に對して開眼せるものは、一切の万有を見るが如く、実智を成就すれば、自ら権智を成就するのである。

一。本文。「達如則心行寂滅。通權則備省衆機。省機之智備応而無知。寂滅之慧亦無知而備省」

一。一如に通達する真諦の智慧を成就した時、心行共に寂滅する。衆生は、心行、即ち分別迷妄の心を生じ、それが行いとなつて外に現れ、貪欲によつて外物を追ひ、心行心行と、流転を続けるものである。しかるにそこに真諦の智を成就すれば、この心行を寂滅せしむるのである。言いかえれば、煩惱を寂滅することによつて、般若の智慧光を顯現するのである。それは丁度、氷に熱を加えれば、融けて水となり、水となれば、鏡となつてものをうつすが如くである。

一如に達する真智は、鏡の一切を写してしかも善惡取捨の情なきが如く、無知である。即ち、この真知の世界、空無所得に達すれば、色も不可得、心も不可得、知るべき色もなく、知るべき心もなく、心行共に滅して唯、無知である。

心行寂滅して無知なる般若の智慧は、それ故に衆生の機類の差別、苦樂因果等の相知らざるなき方便の権智をおこすのである。であるから「権に通ずれば、則ち備さに衆機を省る。」と云われるのである。しかしながら、具に衆生の機類を知るからとて、般若の智より外のものではないが故に、「機を省るの智は備さに応じて無知なり。」と、機を知るの方便智がそのまま、実智の無智なることを示されるのである。されば「寂滅之慧、亦無知にして備に(衆機を)省る」と、どこまでも、真智のままが俗智、俗智のままが真智と、般若と方便の相即することが示されるのである。

一。本文。「然則智慧方便相縁而動相縁而靜。動不失靜智慧之功也、靜不廢動方便之力。」

二智の相摂

一。般若とは、真如実相に通達し、観照する真諦の智であり、方便とは、衆機を知りて、衆生済度の善巧をめぐらす俗諦の智であった。しかるにこの二智は、決して孤立して成ずるものではなくして般若の智に衆生の苦相映ずれば、必ず方便の権智をおこし、方便の権智は般若の真智に依つてはじめて、衆生済度の大用を全うするのである。先に「機を省るの智は、備に依じて無知なり。寂滅の慧亦無知にして備に省る」と云われたのは体の互融に約して、方便は般若を体し、般若は方便を摂することを示されたのである。

今この文は、体の互融がやがて用の相資を起すことを示されたものである。然則とはこれを語るものである。「然れば則ち、智慧と慈悲と相縁じて動じ、相縁じて静なり。」般若は静であり、方便は動である。しかるに方便智の動は、般若の静をはなれてはなく、般若の静は、方便の動をとまなう。動にしていよいよ静、静にしてますます動、動なるままが静、静なるままが動、この動静一如の境を失わないのである。般若の慧は絶対の静であり、方便の智は永遠の動である。般若の静を失うことなくして、方便の動を起し、方便の動を廃することなくして、般若はいよいよ静である。

般若は真如の平等を照らす光であり、方便は衆生を再度する大悲のはたらきである。般若の寂光なくして何ぞ一切衆生の苦悩を救う大用を発することが出来よう。一切衆生を救うの大用、即ち方便なくば般若も亦二乗の証果と異なることはない。

菩薩は限りなく生死に出でて利他を成ずといえども、智慧に住したまうが故に、生死にあつて生死に住せず。如何なる生死動乱の中にあるとも、寂滅の自利を失わざるは、生死即涅槃なりと知るところの慧、よく如に達するが故である。この不住生死の徳を今、「動の静を失わざる」とは智慧之功なり」と説かれるのである。

菩薩は、諸法本来畢竟空にして寂滅なり、と証知すれども、しかも、縁生凡夫の苦悩を省みて、涅槃に住せず、その大慈悲によつて永遠に利他を廃せず。かく、涅槃を悟つて涅槃に住せざる不住涅槃の徳の故に、「静の動を廃せざるは方便之力なり。」と示されるのである。かくして「動静一如」の境とは凡夫迷情の妄動を指すに非ずして、従果向因の菩薩の悲智一体の境を示すのである。

一。本文。「是故智慧慈悲方便攝取般若。般若攝取方便」

方便智は具体的には、智慧門、慈悲門、方便門の三種門を具して、衆生を度するのであつた。このことは、先に詳しく述べた如くである。この智慧門、慈悲門、方便門の三種門は、般若を摂取して、動の中に静を失わぬのであり、悲の中に智慧を失わぬのである。又般若は方便を摂取して、静中動を失わず、慧の中にますます大悲の大用を失わぬのである。かくして二智は互いに相摂して一如に統融するのである。

一。本文「応知者、謂応知智慧方便是菩薩父母、若不依智慧方便菩薩法則不成就」

華嚴經入法界品に言く「以般若波羅蜜為母、大方便為父」

維摩經仏道品に言く「智度菩薩母、方便以為父。一切衆道師無不由是生。」

般若を母に、方便を父に喩えて、この二智より菩薩を生ずることを示すのである。一説に云く、般若の実智は内に法身を養育す、故に母に譬え、方便は外に衆生を済度す、故に父に喩うと。可。

菩薩の法(法とは功德)は智慧を以て如に達し、方便を以て衆機を省る。智慧は静なるが故に母、方便は動なるが故に父、この二智なくば菩薩あるべからず、故に「是れ菩薩の父母なり」と云われるのである。慈悲あるに似たるも智慧なくば凡夫の迷情にすぎず、智慧あるも大悲なければ二乗である。菩薩は必ず二智を所有する。この智慧と方便との二智に依らずば、菩薩の法、即ち功德は成就せざることを決釈せられるのである。されば次にその所由を微釈して云く、

一。本文。「何以故若無智慧為衆生時則墮顛倒。若無方便觀法性時則証實際。是故応知」

一。この節は、悲知双運せざれば、菩薩行の成就すべからざるを結示されるのである。もし智慧を成就することなくして衆生を利益せんとすれば、愛見の悲であつて、凡夫の顛倒に墮するし、もし亦専ら法性を觀じて智慧を得るも、衆生済度の方便なくば、二乗の實際を証するに了る。故に、般若と方便、悲智並行して、菩薩行を如実に成就するのである。天親論主の「応知」とは誠にこの意である。

以上二智のこと、もとより還相の菩薩の徳を示されるのであるが、これを主徳に約すれば、如来正覚の大慈悲、即ちいわゆる論の「正道大慈悲」と示されたものである⁵⁾。正しき智慧より生じたる大慈悲こそ出世の善根であつた、十八願不虛作の徳はこれによつて成就せられるのである。